講座

わかりやすい環境影響評価書を作るには (6)

島津 康 男*

目 次

1. はじめに	6. 「正確に伝える」とは	13. 概要版作成の事例研究
2. よい評価書とは	7. 「知りたいことが書いてある」とは	京滋バイパス宇治地区
3. これまでの事例の分析	8. 準備書と評価書	(日本道路公団)
4. 三つの技術指針	9. 概要版	山口台土地区画整理 (川崎市)
5. 「わかりやすい」とは	10. 現況調査計画書	一宮衛生処理場 (宮市)
手にとる気になるか、やさしい文章	11. 公聴会等の運営	14. おわりに
か、読みやすい構成か	12. 情報伝達の技術指針	

(本号所載はゴジックの分)

13.3 一宮市衛生処理場の建設に係る環境影響評価

1 全体としての特徴

- (1) 全体のページ数は妥当であり、事業計画、地域の概況の占める比率はそれぞれ5.6%, 13.0%で、これも妥当である。
- (2) ページ当りの本文は30字×30行で、各ページとも左側1/4はヘディング用に空けてある。活字の大きさ、特にその字体が読みやすく、文章、図のレイアウトが非常にすぐれている。但し、特殊な活字を使用しているので、印刷コストが普通より高くなっている。又、無理につめてむことをせずスペースが随所にとってあるので、読みやすい。
- (3) データの詳細を付録にゆずっているのは妥当である。
- (4) 大気拡散・水質・騒音・日照の予測シミュレーションをマイコンによって行っており、この程度の事業ならこれで十分である。
欠点としては
- (5) 騒音防止対策 (田中/1976) [p. 141], 騒音・振動対策ハンドブック (発行所・年度なし) [p. 152], など、引用文献の示し方が不正確で、これだけでは探し出せない。論文であれば著者・発表年・雑誌名・巻号・ページが必要であり、書籍であれば編著者・発表年・書名・発行所が必要である。又、p. 149の塩

田論文の引用に見るように、文献名が文中にある上、かつ普通の記載方法によっていないため、見にくいものがある。やはり章ごとに末尾にまとめて示すのがよからう。

- (6) 実施計画が確定していないため、設備諸元に明確でない点があり、予測の前提が不満足である。同様の事情から、工程計画が示されておらず、工事中の影響評価が不十分になっている。

- (7) 数式の記載は許容出来る範囲であるが、やはりミスピントが発生している。

2 事業計画・計画地域の特性 (第2, 3章)

- (1) 事業の必要性、特に忌避施設を作らねばならない理由、イメージアップのためにどんな方策をとるかを述べているのは妥当である (p. 10~11)。
- (2) しかし低希釈二段活性汚濁法とはどんなものか、高度処理とは何かを説明する親切がほしい。p. 14の平面図の右ページは空白になっているので、ここに説明を記載するとよい。なお、平面図だけでは施設のイメージがはっきりしない。やはり斎場・清掃工場を含めた写真か、透視図 (パース) が必要であろう。
- (3) p. 13, 16の地図は似たものの重複でかつ読みにくい。立地上の特性を理解させるには、次の点の強調が必要である。即ち
 - (i) この地区には、斎場・清掃工場・既設の衛生処

* 名古屋大学理学部教授 Yasuo SHIMAZU

理場、さらに木曽川町清掃センターが一ヶ所に集まっていること。

(ii) 排水先である野府川の流域構造

(iii) 搬入車の搬入ルートとの関連で、道路網の状況 p.16の図をp.13にもって行き、p.16には上記のことを明示した方がよい。

3 環境への影響項目と関係地域の設定(第4章)

関係地域の設定にあたって、機械的な方式をとらず、項目別に予備計算を行って設定しているのは妥当である。p.53の設定図は理解を助けるのに適切であるが、地図をそのまま使っているのではやや読みにくい。

4 環境の現況と影響予測及び評価(第5章)

(1) 環境項目別に現況から評価までを記載している点は妥当であるが、12項目にわたる記載を第5章一つに入れており、その為一つの章の分量が182ページ(本文の73%)になっている。従って、ランニング・タイトルが182ページにわたって「環境の現況と影響予測及び評価」だけになっており、それぞれの項目の記載個所が検索しにくい。むしろ、水質・大気・・・の各項目をランニング・タイトルにすべきである。

(2) p.112~114の大気汚染パターンには、予測に用いた16方位の風向きがそのまま現れており、適切でない。

(3) 騒音レベルの単位にdB、dB(A)、ホンが混ざっている。

(4) 悪臭では悪臭物質濃度を臭気濃度とよんでいるが、これは正確でない。三点比較式臭袋法を用いた感覚的な指数を普通臭気濃度とよんでおり、これによる評価も必要である。又、排出源はp.165にみるように多数あり、ダクトで一個所に集中して放出するとしているが、その位置および性能を記載していないので、点源を仮定した拡散予測の結果が妥当かどうか判断できない。現況(これは多数点源)の再現計算もない。

5 概要版の試作

第9章に述べた趣旨に従って、本事例に対し、B4版4ページ(B3版裏表印刷を折返りしたもの)の概要版を作成した。特に注意したのは次の点である。

(1) 事業の概要・地域の概要の記載に全体の20%をあて、しかも、これらのうち、環境への影響の観点から重要と思われるものを重視している。いわゆる忌避施設を作るにあたっての建設理由、イメージ改善のための配慮点、この地区が斎場・清掃工場・衛生

処理場の一体となった特別な所であること、などである。

(2) 供用後の影響の記載には50%をあて、見開き2ページに収まるよう配慮してある。そして、項目別に文章の形にした例と、表の形にした例との双方を示した。同じスペースをとっても、文章形式の方が内容豊富になっている。さらに、形式によって表現のニュアンスに差の出ることに注意してほしい。文章にすると、説得性が強くなる代わりに、押しつけになる恐れがある。どちらがよいかは一口にはいえないが、項目数が少ない場合は文章形式、多い場合は表形式がよいかもしれない。

(3) 計画地域を示す図は、一般的特徴の項で述べたように、分かり易いものに取替えた方がよい。

(4) 項目記載の順序は、影響が重大と思われる順になっており、必ずしも原評価書の記載順になっていない。これにより、大要がつかみ易くなっている。概要版の場合結果だけを示すだけになり、何故そのような結論になるかを示す余裕はないが、論理の流れは明確につかめなくてはならない。その目的には、表形式がすぐれている。表を横に辿ればよいからである。

(5) よいことづくめのクレーヤー宣言にならぬよう、ありのままを示すことを考えている。一方、事業者の責任に係る事項を明確にし、対策は具体的に示す。

(6) 工事中の影響は4ページ目に廻し、しかも重要なものだけに止めてある。

(7) この事例では、環境影響評価が制度化されていない。そして、作成後に評価書が公表されるだけで、準備書修正の手続きがない。4ページ目後半の、手続きに関する記載は、このことを反映している。

(8) 原評価書では、騒音におけるホン・dBなど単位に統一がないが、ここでは適宜揃えてある。悪臭の項も変えてある。電波障害・日照阻害の予測に不十分なところがあるが、本事業ではあまり重要な項目ではないので、原評価書の記載をそのまま使用している。

(9) 日本語ワード・プロセッサを使用している。字の大きさが二種類に限られているが、手間・コストのことを考えれば、この程度でも良いのではないか。なお、多色刷の効果は試みなかった。

昭和57年3月

一宮市衛生処理場の建設に係る環境影響評価（あらまし）

一宮市

事業の目的

都市化が急速に進む中で、一宮市のし尿処理能力は限界にきています。そこで、現在の処理場を改築するとともに、南側の隣接地への拡張をはかり、処理能力を三倍にすることを考えております。これにより、市内のし尿と浄化槽汚泥のすべてを処理することができるようになります。

事業の内容

処理能力

新設分 200kl/日

改設分 100kl/日 計300kl/日

内訳は

生し尿 70%

浄化槽汚泥 30%

処理方式 低希釈二段活性汚泥法

発生汚泥は焼却処理

特に配慮する点

- ・ 臭気を出さないようにする、排水を極力少なくするため低希釈処理を行うなど、公害防止につとめる。
- ・ 設備を建屋の中に納め、水槽は出来るだけ地中において、目立たぬようにする。
- ・ 安全で安定した運用管理を行う。搬入車の管理に注意する。

以上により、衛生処理場のイメージ改善につとめます。

事業の行われる場所

一宮市奥町字六丁山

市の西北端にあり、木曽川町との境です。

■ は新しく拡張する部分で、
 ▨ には現在の処理場をはじめ、
 一宮市の斎場・清掃工場（ごみ焼却場）
 ・木曽川町清掃センターがあります。
 処理場からの排水は西に隣接する野府川へ排出します。

0 1 2 km

環境影響評価とは

事業の実施が、人の健康や安全で快適な生活、さらに動植物を含む自然に与える影響を、前もって予測し、適切な対策を考えます。そして、この結果を文書にまとめて公開し、地域の方々の御意見を事業の実施に反映させます。以上を合わせて環境影響評価とよびます。

このパンフレットは、環境影響評価の結果のあらましを示したものです。考えられる主な影響は、運転にともなう悪臭・騒音・振動・排水による野府川の汚濁・汚泥焼却による大気汚染・車両の出入りによる交通事故などです。これらの影響を次のページに示しました。

環境に与える影響と対策

悪臭

・ 処理場のイメージを左右するのは、まず悪臭です。一年を通して主に風下となる南東の敷地境界で、主な悪臭物質の現況濃度は表の通りです、これらの原因は現存する処理場、清掃工場です。

	現況 (ppm)	発生源 (ppm)
アンモニア	0.02	1 以下
硫化水素	0.002	0.02以下
メチル メルカプタン	測定限界以下	0.02以下

さらに、これらの悪臭物質の混ざったものを、人は臭覚として感ずるわけですが、臭覚の強さは臭気濃度という指数で表され、現況でこの大きさは15以下です。

・ 悪臭防止法では、発生源での悪臭物質濃度の基準が決められており、これは上の表の通りです。本事業でもこの値を守ります。又、敷地境界での臭気濃度を、準工業地域で苦情の出ない限界とされている15以下にすることを目標とします。

・ 発生した悪臭物質は、風によってひろがります。気象条件を考えて予測すると、敷地境界より外では、上記の目標値をこえることはなく、平常時に不快を感じることはありません。

・ しかし、運転ミスなどで悪臭が一時的にもれ、これが不快感を与えることが考えられるので、発生するガスはすべて一ヶ所に集め、脱臭装置を通してから排出します。又、車の出入口にはエアカーテンをつけ、内部の空気を遮断します。

騒音・振動

・ 敷地境界での騒音は、昼で50～55db (A) 、夜は44～49db (A) ですが、これは規制基準を下回っています。主な、騒音源は現在の処理場・清掃工場です。

・ 消化槽ブローア・キルン・脱水機・コンプレッサーなどは、機械から1mのところでは70～90db (A) の騒音を発生しますが、これらは建物の中におくか、防音装置をつけます。

・ 野府川をはさんで住宅もあるので、処理場からの騒音を、敷地境界で昼夜とも45db (A) 以下におさえることを目標にします。建物による遮音効果も考えて、これは十分達成できます。

・ 振動に関しては、人の睡眠に支障をおこさない55db (A) 以下にすることを目標にし、騒音の場合と同じように、敷地外でこれを達成することができます。

水質

・ 処理場からの排水は、野府川に排出します。野府川は、有機物汚濁が進んでおり、この地域の現状水質は表の通りです。

	現況 (ppm)	放流水 (ppm)
BOD	10 ～15	10以下
COD	20 ～30	20以下
T-N	3.6 ～17.6	10以下
T-P	0.85 ～1.96	1以下
	色度	20度以下
	大腸菌群	3000個／ml以下

なお、現処理場からの放流水のBOD は25 ppmで、SSとともに基準すれすれです。

・ 野府川の水質を現状より悪化させないことを目標に、放流水の水質を表の値におさえるよう、処理します。これにより、排水口のすぐ下流で、BODは1ppm減り、わずかながら改善されます。

・ しかし、何分にも野府川自身の汚濁が進んでいるので、野府川の浄化には役立ちません。このためには、上流を含めて流域全体の対策が必要です。

大気

現処理場では、発生する汚泥を乾燥した上、外部に持ち出しています。新しい処理場では、これを焼却処理した上、1日800kgの焼却灰を処分地に持ち出します。

- ・ このあたりでは、現在1時間値の1日平均が
 二酸化硫黄 0.017ppm
 二酸化窒素 0.04 ppm
 ばいじん 0.18 mg / m³

で、環境基準をみたくしています。

- ・ 焼却を行うことにより、排ガス量は増加しますが、大気濃度について現状を悪化させないことを目標にします。

・ 気象条件を考えて、排煙の拡散を計算すると、最大着地濃度の変化は1 %以下です。

交通安全

- ・ 衛生処理場で考えなくてはいけないのは、車両の出入りです。稼働がはじまると、1日の搬入車は168台で、10～12時及び15～16時のピーク時には、1時間32台に達するものと推定されます。
- ・ 現在搬入車は南の県道奥一江南線（平均で1時間あたり280台の交通量）を経て、野府川左岸道路（1時間あたり80台）から出入りしています。今後も主にこの経路をとることになるでしょうが、この場合、ピーク時に、県道では1分5台の交通量が6台に、左岸道路では1分1台が2台に増えます。
- ・ 搬入車の渋滞は、施設のイメージダウンの原因ですが、もともと交通量の少ない地区なので、上記の交通量増加も、渋滞の原因にはなりません。
- ・ なお、車両の出口・入口をわけ、経路については、関係機関（警察）と十分協議し、安全設備をつけます。

景観

- ・ この地区は、農地のひろがる田園地域であり、集落から孤立しています。しかも、斎場・墓園・清掃工場が一体となった地区です。現処理場の建物高は10m以下で、清掃工場の方が目立ちます。
- ・ 以上の現況にもとづいて、新しい処理場が景観上違和感をおこさないことを目標にします。
- ・ このため、緑地帯を設けて視覚上の配慮を行います。新処理場の建物高もこれまで通り10m以下でし、新設の場合に比べて違和感は大きくないと考えます。

日照阻害

- ・ 日照阻害で特に問題になるのは、敷地の北側と西側ですが、北は斎場です。西側に3階アパート1棟、民家1戸が隣接していますが、処理場の建物高が10mの時、冬至の日の8～9時に、上記の家が日陰になります。
- ・ 普通、日照阻害の対象になるのは、冬至日に日陰時間が4時間以上という場合ですが、建物構造を更に検討して、日陰時間を最小にするよう配慮します。

電波障害

- ・ この地区は、テレビ放送局から20～30kmのところにあり、電波は南東方向から来ます。
- ・ 建物の陰による障害は20～30mの範囲と予測され、敷地内に収まります。反対波による障害の範囲は、もっと小さいものと予測されます。
- ・ しかし、もしテレビ受信に影響が出た場合は、共同アンテナ又は個別アンテナを設置します。

廃棄物

- ・ 大気の項で述べたように、汚泥処理に伴って焼却灰が発生します。
- ・ この焼却灰は業者が処分地へ持ち出しますが、その際、若干水分をもたせ、又シートをかぶせて、大気への飛散を防止します。

土壌

- ・ この地域の土壌はカドミウム0.18mg/kg、砒素1.8mg/kgを含みますが、これは一宮市内の平均濃度です。
- ・ 焼却に伴うばいじんによって、重金属や有害物質が二次的に土壌を汚染する心配はありません。

地盤沈下

- ・ 地盤沈下がおこると、回復がむずかしいので、地下水位の低下を含めて、障害をおこさないようにしなければなりません。
- ・ この地域は沖積地の典型的な地層で、表層20mは軟弱ですが、20mより深い所は玉石混じりの砂礫層です。ここまで基礎をおろせば、建物支持力は十分で、施工に伴って周囲に地盤沈下をおこすこともありません。
- ・ 又、新たに地下水の揚水を行わないので、これによる地盤沈下の進行や、地下水位の低下はおこりません。

工事中の影響

建設には約二年かかる予定ですが、その間に考えられる影響として、次のものがあります。

騒音

- ・ 「特定建設作業に係る規制基準」を守ります。その内容は空気圧縮機で75dB(A)以下などです。
- ・ 敷地境界でこの目標値を達成できると予測されますが、なお、低騒音型の機器を使用し、必要に応じて防音シートを用います。

振動

- ・ 騒音の場合と同じく、「特定建設作業に係る規制基準」を守ります。その内容は、杭打ち機で75dB(A)以下などです。
- ・ 敷地境界でこの目標値を達成できます。しかし、低振動型の機器を使用するなどの注意をします。

地盤沈下

- ・ 工事に伴って地盤沈下や地下水位の低下を生じないようにします。
- ・ 矢板打ち込みによる影響は、敷地内に止まります。

廃棄物

- ・ 既設の処理場を壊すので、廃材6000トンが発生します。これは業者が持ち出して処分します。
- ・ その際、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」を守り、周辺の方々の日常生活に著しい影響を与えないよう注意します。

交通安全

- ・ 工事車両の出入りによる交通量の増加が、周辺の一般交通や歩行者の安全に支障を来さないようにします。
- ・ 現在の交通量が少ないので、交通渋滞はおこらないものと予測します。
- ・ 大型車・特殊車両の運行には、経路などについて関係機関（警察など）と協議し、運転者には交通法規を遵守させます。

以上の環境影響評価の結果により、この事業は環境に大きな影響を及ぼすことはないものと判断します。今後、この結果を、事業の実施に生かすことにします。

環境影響評価書の縦覧と説明会

縦覧場所 一宮市市民部清掃課（一宮市奥町字六丁山）
期間

地元説明会の場所・日時は町内会を通じて追ってお知らせします。

環境影響評価についての御意見・御質問は

一宮市市民部清掃課

0586—45—4423へ

	現況	環境保全目標
悪臭	<p>主要風向の風下にある南東の敷地境界での悪臭物質濃度</p> <p>アンモニア 0.2 ～0.22 ppm</p> <p>硫化水素 0.0023～0.0027 ppm</p> <p>その他は 測定限界以下</p> <p>人の嗅覚を表す臭気濃度は15以下</p>	<p>発生源で悪臭防止法に定める</p> <p>アンモニア 1 ppm 以下</p> <p>硫化水素 0.002ppm 以下</p> <p>メチルメルカプタン 0.002ppm 以下</p> <p>敷地境界で臭気濃度15以下</p> <p>(準工業地域で苦情のない限界)</p>
騒音	<p>屋間 朝夕 夜間</p> <p>50～55 46～49 44～49 dB (A)</p> <p>は規制基準以下。現処理場の主な発生源は、消化槽ブロワー・キルン・脱水機・脱臭コンプレッサーで、70～90 dB (A) (発生源から1m 地点で)</p>	<p>用途地域未指定地域であるが、野府川をはさんで準工業地域があり、住宅もある。そこで、敷地境界で</p> <p>屋間 朝夕 夜間</p> <p>45以下 45以下 45以下 dB (A)</p>
振動	<p>屋間 40 dB (A) 以下で、規制基準を下回る</p>	<p>人の睡眠等に与える振動の影響についての科学的知見より、屋間 55db (A) 以下、夜間 55db (A) 以下</p>
水質	<p>野府川は有機物汚濁が進み、排水河川となっている。事業地域の近くでBOD 10 ～15ppm, COD 20 ～30ppm, T-N 3.6～17.6ppm, T-P 0.85 ～1.96 ppm。重金属の負荷はない。現有施設の排水はBOD (25ppm), SS とも基準すれすれである</p>	<p>野府川の水質を現状より悪化させないように、放流水の水質を</p> <p>BOD 10ppm以下 色度20度以下</p> <p>T-N 10 " 大腸菌群</p> <p>T-P 1 " 3000個/㎖以下</p> <p>SS 10 " "</p>
大気	<p>今伊勢町で</p> <p>50%値 98%値</p> <p>二酸化硫黄 0.005ppm 0.017ppm</p> <p>二酸化窒素 0.019 0.04</p> <p>ばいじん 0.075 0.18</p> <p>現有施設南東の一宮市常時観測所では環境基準をみたしている</p>	<p>田園地域なので、現有施設からの寄与を上回らないようにする。</p> <p>排ガスについて</p> <p>硫酸酸化物 k <3.5</p> <p>窒素酸化物 150ppm以下</p> <p>ばいじん 0.05g /N m²以下</p>
交通安全	<p>計画地周辺の道路は</p> <p>東に県道名古屋—官線</p> <p>(平均1000台/時)</p> <p>南に県道奥一江南線 (平均280 台/時)</p> <p>西に野府川左岸道路 (平均80台/時)</p> <p>現有施設への搬入は南から野府川左岸道路を経るのが普通</p>	<p>交通量の増加が、周辺地域の一般交通及び歩行者への影響の及ばないように考慮する</p>
景観	<p>農地の広がる田園地域にあり、集落からは孤立している。計画地域は畜場・清掃工場が一体となっている。現有施設の建物高は10m 以下で、高い清掃工場の方が目立つ</p>	<p>違和感をおこさせない。</p>
日照	<p>西側に3 階アパート1 棟、民家1 戸。北側は畜場</p>	<p>周辺の居住環境に著しい影響を与えない。</p>

汚泥処理を乾燥から焼却に変えるため1日に800kg /日の焼却灰が発生します。これは業者が持ち出して処分地へ運びますが、搬出の際、少量の水分を含ませ、又シートをかけて、飛散を防ぎます。

	予測	評価と環境保全対策
悪臭	気象条件を与えて臭気の拡散を予測すると、発生源から50m（敷地境界）までは濃度が減少しないが、その外側では急激に低下する。	発生源で目標値を達成すれば、敷地外で通常不快を感じることはない。運転ミスなどによる一時的な臭気もれに対しても、ガスを一ヶ所に集中し脱臭装置を通してから排出すること、出入り口にエアカーテンをつけること、によって対処する。
騒音	清掃工場・畜場を含めた敷地内で45dB（A）以下。影響は北西方向の畜場に及ぶが、その他の方向では、建物の遮音効果によって外部に及ばない。	発生源である消化槽ブローア等の機械は屋内に設置し、屋外設置のものについては、防音装置により、目標値は十分達成できる。
振動	敷地内で、目標値の55dB（A）以下	通風機やこれに連結するダクトの配置を考えて、目標値は十分達成できる。
水質	放流直下の野府川水質は BOD 15.2 ppm → 14.2 ppm のように改善される。	排水量を極力減らすため、低希釈処理を行う。排出負荷を現況より減少させることを前提にすると、予測のように放流直下の野府川水質は悪化しない。しかし、流域全体での対策がないと、野府川の水質改善は無理である。
大気	汚泥処理を現行の乾燥から焼却（煙突高15m）に変えるので、最大着地濃度が 硫酸酸化物 0.0002 ppm 増加 窒素酸化物 0.0008 ppm 増加 ばいじん 0.0001 mg / m ³ 減少	排ガス量は増加するが、大気濃度の変化は微小である。
交通安全	一日の搬入車は168台と推定され、ピーク時は10～12時、15～16時である。又、ピーク時には32台／時に達するものと予測される。南の県道では1分あたり5台が6台へ、野府川左岸道路では1分あたり1台から2台に増加する。	現状の交通量が少ないので、予測のように増えても交通渋滞は考えられない。搬入については、出口と入口を分離し、搬入経路については、関係機関（警察など）と協議し、必要に応じて安全設備を取りつける。
景観	現在既に施設があるので、新設時に比べて違和感が小さい。	緑地帯を設けて、視覚上の配慮を行う。
日照	建物高10m、煙突高15mの場合、冬至において西側の敷地境界外で、8時から9時まで日陰になる。	建物構造を検討し、日陰の範囲を最小にする。普通冬至に日陰4時間以上が補償の対象。

その他、土壌汚染・地盤沈下・電波障害の影響は小さく、心配はありません。

14. おわりに

本報告の作業が進んでいる段階で、

電通 (1982) 環境影響評価におけるコミュニケーション技法の開発に関する調査研究報告書 (昭和56年度環境庁委託), pp. 178
が公表された。その目的は本報告と同じである。その目次は、同報告書の結論をはっきり示しているので、関係のあるところを再録しよう。

I 環境影響評価準備書

1 準備書の意義と課題

2 科学的推論に基づいて作成された文書の要件

- 論理をつかみやすい構成
- 理解しやすく表現された情報
- 事実と意見との区別
- データ等の出所明示

3 準備書の内容構成

- 概要
- 事業者名
- 事業計画

事業の目的、事業の内容

• 調査

重要な情報を重視する

評価項目ごとに調査・予測・評価を記述する

調査がどのように行われたかを明確にする

• 予測

予測の手法及び予測の前提条件を明らかにする

予測結果を関係住民にわかりやすく表現する

• 評価

• 資料編

専門的な検討に耐えうるに必要な情報を網羅する

本文叙述と関連づける

書籍としての体裁を整える (別冊の場合の章だて・目次の完備など)

4 わかりやすい文章

• 適切な用語

理解されやすい用語を使う (外国人名には仮名を併用するなど)

あいまいな表現になりやすいことばに注

意する

- 読みとりやすい用字

- 明瞭な文

なるべく短い文に分ける

明快な表現を心がける

- 文章のまとまりをつかんだ表現

パラグラフを意識した記述

文章の展開を意識した記述

見出しの設定

- その他の注意事項

繰り返しの場合は参照ページを入れる

図表で説明してあっても、文章だけ読んでいけばわかるようにする

チェック者の設定 (推敲を念入りに)

- 5 表、グラフ、地図、図、イラスト、写真、数式の示し方

- 6 論旨を把握させるための工夫、読ませるための内容上の工夫

- 目次を整える
- リードをつける
- 柱をつける
- 表現が具体性を持つこと
- 情報提供力を持つこと
- 親しみをもたれること
- 読み手の立場に立った作成責任者の設定

- 7 形態上の利便性の促進

- 見開き処理・分冊化・とじ
- その他の工夫

判の大きさ (B4を2段組み、あるいはA4)

文字書体、大きさ、字詰め、改ページ、段落、アクセント、紙面デザイン、紙の色、表紙、みみ

- 印刷管理

II 公告

1 公告の方式

2 公告を補完して行うことが望ましい周知活動

- チラシ・パンフレット・ポスター・さまざまなパブリシティ・広告

III 縦覧

1 縦覧の方法

2 準備書縦覧の補完活動

- 閲覧、実費徴収のコピーサービス
- 貸し出し

- ・縦覧期間終了後の閲覧

IV 説明会

- 1 意義と課題
- 2 企画
- 3 実施準備
- 4 進行
- 5 様々な形態

付 準備書の内容周知を補完するための概要を記載した文書

- ・用途とボリューム
- ・概要の作成法

V 意見書

VI 公聴会

その他、参考となる文献として

米国運輸省連邦道路局 (1979) パブリック・ミーティング及び公聴会の効果を高めるために (環境庁訳) pp. 441

島津康男 (1982) よい環境影響評価書とは、自治体レベルの事業を主に、環境情報科学, 11巻, 71-78

がある。

第2回 環境科学合同研究発表会

〈日時〉 昭和58年11月10日 (木), 11日 (金)

〈会場〉 東京工業大学大学院総合理工学研究科大会議室
(横浜市緑区長津田4259, 東急田園都市線 すすき台駅下車 徒歩10分)

〈主催〉 環境科学合同研究発表会連絡協議会
(北海道大学・筑波大学・神戸大学・広島大学・東京工業大学の関係研究科)

〈問い合わせ先〉 東京工業大学大学院総合理工学研究科 (045-922-1111 内線2502)

11月10日(木)

1. 環境化学

- ・道路きわで採取した降下物の環境化学的特徴とその起源・都市下水汚泥の化学組成とその起源・大阪湾堆積物の磁化測定

2. 教育・情報

- ・環境原論の教育事例報告・環境科学教育におけるオンライン文献情報検索・情報環境論の動向

3. 学内見学

- ・キャンパス間テレビ講義室：超高電圧超高真空高分解能電子顕微鏡・MHD発電実験装置：レーザートンネル (長距離測定実験室)

4. シンポジウム「環境科学におけるエネルギー問題」

- ・ポリ酸イオンを光触媒とするバイオマスからの水素発生・ポリフィリンによる光エネルギー変換・クリンエネルギーとしての水素吸蔵物質の開発・長期蓄熱媒体としての地盤の利用とその解析法・都市環境とエネルギー・ソフトエネルギーを導入した地域環境計画—十勝地域を事例として—・エネルギー開

発と環境保全とをめぐるコンフリクトの政治経済学的分析・総合討論

5. 懇談会

- ・長津田キャンパス内食堂
(会費 一般 3,000 学生 1,500円)

11月11日(金)

6. 騒音

- ・大規模工業団地の開発に伴う周辺地域における環境騒音の経年変化について・北海道内諸都市における都市騒音の実態

7. 緑地環境

- ・札幌市の緑地環境の動態・日本列島における照葉樹林の組成分化と気候条件について・マングローブ生育条件について

8. 地域環境

- ・流域における水系網の成長について・都市気温の成因としての土地利用形態について・ネパール及び日本の山地地域の活性化